
See you again.

七谷恭太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

See you again .

【Nコード】

N0703Q

【作者名】

七谷恭太

【あらすじ】

東風谷早苗の幻想郷へ来る前のお話。

（前書き）

初投稿になります。

駄文ではありますが、よろしければ呼んでくださいな。

チツチツチツチツチ

時計の音だけが響く暗い部屋の中で、ボーっとしていた。

現在午前4時。いつもなら寝ている時間だが、ふとした夢を見て眼が覚めてしまった。

さよなら。

先ほど見た夢の中で少女が言った言葉だ。

彼女の名は東風谷早苗。特別親しいわけでもない、ただのクラスメイト。言葉なんて挨拶ぐらいしかしたことがない彼女が夢に出てきて別れを告げてきたのだ。

まあ所詮夢だと普通は割り切ってしまうだろうが、青年には割り切れない理由があった。

予知夢を見るのだ。

そう頻繁にみるわけではない、が昔からそうであった。幼いころから、非現実的な夢は見なかった。ひどくリアリティがあり、実際に起こっても不思議ではないような夢ばかり。そんな夢ばかりを見ていた。

それが現実には起きていると自覚したのは、いつのことだろうか。

最初はまったく気が付いていなかった。あれ？これ前にも経験してなかったっけ？と思うことが多かったが、特に気にしたことがなかった。だがいつだったか、友人が怪我をしたことがあった。怪我自体は酷いものではなかったが、俺はそれに関して、デジャブを強

く感じていた。前にもこんなことがあった。それを友人に言ったが、そんなことはないと言われた。

それからだ。予知夢を見るということを自覚したのは。

何度も同じようなことがあった。談笑をしていてもなんとなく新鮮味がなかったり、サプライズ的なことがあっても対して驚かなかったり……なぜだか世界が色褪せて見えた。

高校に入ってから同じだった。

そういったことからか、クラスメイトに壁を作りがちだった。もちろん挨拶ぐらいいは交わすし、話しかけられればちゃんと答える。ただ本音は言わない。その程度だった。

……そういえば東風谷は積極的に挨拶をしてきたような気がする。見かけたら大概挨拶をしてきた。まあ、だからなんだという話だが……。

「あ、井上君！おはようございます！」

気づいたら学校へ行かなければならない時間になったので、準備をして学校へ出た。若干寝不足で、ふらふらと自転車をこぎ、ようやくたどり着いたと思い、教室のドアと開けた途端これだ。当人とあってしまった。とりあえず短い返事を返し、自分の席へ進んだが……。

「……………」

「……………」

なぜ後ろについてくる。

とりあえず荷物を置き、振り返った。

「何？」

「え？」

「いや、だから何の用だよ？」

「別に用事なんてありませんけど？」

「じゃ、何でついてきてんの？席は向こうだろ？」

「おしゃべりするのに何か用事が必要なんですか？」

……………なんだこいつ。

おしゃべりつて、あんまり関わりないよな？俺たち。確かに俺の夢には出てきたけど、それは俺の一方的なもので、東風谷には関係がないよな？

「一度、井上君とお話してみたかったです」

そういった東風谷はあいていた隣の席に座り、話し始めた。

東風谷が一方的に話し、俺が答える。

その形でHRまで会話をした。それで終わりだ。

学校が終わるまで、会話しなかった。

その日の夜のことだ。ふらりとコンビニで数本の飲み物と適当な菓子類を買い、ぶらぶらと歩いていた。特別目的もなかったが遠回りをして帰ってみたいした。

「……………あ」

前方から知った人間が歩いてきた。ボーッと空を見上げながら、ふらふらと歩いている。

「……………前見ねえとあぶねえぞ」

「え？」

近づいても気がつかなかったようで、はじめてここで目があった。

「い、井上君？」

「よう、東風谷」

近くに落ち着ける場所を探し、腰をおろした。

「で、何してんだよ？」

「……………」

東風谷は答えない。

「はぁ……………ほれ」

とりあえず袋の中の飲み物を一本出して、差し出した。それを無言で受け取り、そのまま動かなくなった。

どうしたもんかと思いながら、自分もすでに開けたペットボトルの中身を流し込んだ。

「……………もし」

「ん？」

「もし、家族が危険で、今の環境を捨てて、遠いところへ行かなければならなくなった時、どうしますか？」

「……………」

「もし、今の全てを捨てれば、大切な人が助かるとしたら、どうしますか？」

……………やはりあれは予知夢だったらしい。東風谷は何らかの理由でここを去らなければならないようだ。それで悩んでるらしい。

「はぁ……………」

ため息をつく、と、ビクッと東風谷の体が震えた。そしてとり作ったように笑う。

「は、ははは。すみません、変なこと聞いて。忘れ……………」
「とりあえずお前、馬鹿？」……………え？」

「全てを捨てるなんてできるわけねえだろ？…というか、全部捨てる必要なんてないだろ？」

「……………」

「明日」

「え？」

「またここに来い。待ってっから」

「……………」

「返事」

「は、はい」

「じゃ、またな」

次の日も、普通に学校へ行っただ。
東風谷は来ていないらしく、特別何も変わったことはなかった。

学校が終わり、直接昨夜の場所へ行った。東風谷はいない。息を
ついて、そこに腰をおろした。

だがしばらくたって、東風谷は来なかった。

「……………あんにゃろ」

結局日が沈んでも東風谷は現れなかった。

「来ない……………か」

もともと無理やり結んだような約束だ。来ないのもある意味当然
かもしれない。

「つたく……………くあゝ」

欠伸が出た。そういえば昨日あの後もしばらく起きていたしな…
……………。

ボーっとしていると、そのまま意識が落ちた。

「……………上君。井上君」

「あん？」

誰かにゆすられて、眼を覚ました。

「こんなところで寝てると、風邪引きますよ？」

「東風谷……遅い」
「う、ごめんなさい」
「はあ……ほらよ」

バックから取り出した袋を渡す。

「……これは、クッキー……ですか？」
「そうだよ」
「……井上君が、作ったんですか？」
「……なんか文句があんのか？」
「……いえ、ちよつと、意外だったのよ」
「……はあ、どうせ似合わねえよ」
「別にそんなことはないと思いますけど……」

はあ……とため息をついて、立ち上がった。

「じゃあな」
「え？これだけ？」
「そうだよ。あ、それ、向こう行って食べよ？」
「は、はい。わかりました」

ふに落ちないのか、首をかしげながら立ち上がる東風谷。

「東風谷」
「………何ですか？」
「またな」
「………え？」
「ま・た・な」
「あ、はい。また……いえ、

……さよなら」

……はあ。こいつは……。

「またな、つったらまたな、だろ」

「で、でも」

「あゝもう！

賭けだ、東風谷！」

「へ？」

「賭けだ賭け！お前がどこに行くのかしらねえ！でもな、絶対に会えねエなんてないんだよ！もう一度会えたら俺の勝ち！会えなかったらお前の勝ち！わかる！？」

「は？」

「負けたら何でもしてやる！その代わり俺が勝ったらお前も俺の言うこと聞け！」

「あ、会えなかったらなにもできないじゃないですか！」

「あ？関係ねえよ！絶対会ってやるから！なんだったらここで罰ゲームの内容言つか！？」

「じゃ、じゃあ！会いに……来てください」

「あ？」

「もし、私に会えなかったら、会いに来てください！それが罰です！」

「……はっ。わかってるじゃねえか」

「じゃあな」

「ええ。じゃあ……また」

「また、会いましょう!」

「ねえねえ早苗、それ何?」

幻想郷について、騒動があつてから、ふとこのことを思い出し、荷物の中からそれを取り出した。そこに諏訪子様が来て、それに興味を持った。

「クッキーですよ。食べますか?」

「おお!食べる食べる!」

「じゃあ、加奈子様も呼んでお茶にしましょう」

「うんうん!」

お茶の準備をして、クッキーをお皿に盛りつけたときに、一緒に入っていた紙切れに気がついた。

諏訪子様も加奈子様もすでに居間に座っており、気づいたのは私だけだった。

『また賣方と
See you again
』

（後書き）

ど、どうでしょう？

至らぬ点多く、読みづらいと思います。

もしできれば、アドバイスや感想などもくれると、非常に喜びます！
では、またどこかで会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0703q/>

See you again.

2011年1月16日05時24分発行